

基調講演「温故知新」

黒川 清（政策研究大学院大学教授、前内閣特別顧問）

私たちは今、多くの過去の人たちの努力、ストーリーと人間の長い歴史の繁栄の上にたまたまいて、研究の機会を与えられているのではないか。では、これからどういう機会が出てくるかと考えてみると、非常に難しいところにきていると思う。

「温故知新」という言葉は、昔からどこの文明でもいわれていることである。キケロも紀元前1世紀ごろに「*Historia Majistra Vitae*（歴史は人生の先生である）」、つまり、自分だけ賢いと思っているのはとんでもない話で、今までの多くの知識ではなく知恵がつきながら、私たちが今いると言っている。

中国的な賢さで言うと「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」ということを言っているわけだが、今の日本のリーダーを見てみると、自分の過去の経験だけでもものを言う人があまりにも多すぎる。普通の人はその程度でもいいのだが、社会を構成する各分野でそれなりの責任がある人たちは、そういうことでは困る。なぜバイオリソースが大事なのか。いろいろなものの遺伝子の保存、種の保存が大事だということは分かるのだが、なぜだというフレームが、国民も含めて今のグローバルな世の中である程度理解されなければ、政策にもならないし予算も付かない。これから10年間、まだ59兆円道路に使おうなどという国だから、ろくなことはない。そういうことがなぜもっと「学」という自立した人たちの集まりから出てこないのかということ、私は非常に不満に思っている。

そこで、幾つか **Suggested Readings** を示しておきたい。最初は **Jared Diamond** の幾つかの著作である。**Jared Diamond** は本来は医師で、**UCLA** 医学部で生理学教えていたが、ここ40年近く、毎年鳥を見にパプアニューギニアに行っている。それを基に、パプアニューギニアの先住民たちはそれなりの生活の知恵があり、私たちに比べても能力も高く、何の差もないと思うけれども、なぜか世界はヨーロッパの科学技術と文明に支配されている。これはなぜかということ、いろいろ考えながら書いた本が、『*Guns, Germs and Steel*（銃・病原菌・鉄）』である。

Jared Diamond はもともと科学者でもあることから、観察と分析にいろいろな作業仮説を作りながら科学的根拠によって分析し、解説している。それを見ていくと、パプアニューギニアには、世界に7000語ぐらいある言語のうち3000語がある、それは、それぞれが地理的条件で孤立されていたわけで、彼は言葉の分析から、「パシフィックアイランダー」は台湾の北のあたりにいた人たちではないかと言っている。その後、遺伝子解析ができるようになってミトコンドリア遺伝子を分類していくと、それを裏付ける結果が出てきた。これは実に不思議なことだが、**Jared Diamond** が立てた仮説が、遺伝子解析というもっと客観的な方法で証明できるようになったのは、サイエンスではなく分析の方法が進んだだけの話で、その考え方にはもっともっと長い間の知恵があるのではないかということの参考になる。

彼はまた、おとし（2007年）の暮れに『*Collapse*（文明崩壊）』という本を出した。その中で、人間は長い間いろいろな文化、文明や社会を作ってきたが、どういう社会、文明が滅び、どういう社会、文明が栄えたのかということ、各種のデータ、科学的証拠を示しながら分析、解

説している。これは非常に大事なことで、私のブログにも書いたが「共通項は環境である。自分たちが住んでいる周りの環境が駄目になると、必ず滅びる。イースター島と同じである」といったことが書いてある。ぜひ読んでいただきたい。

次は、Thomas Friedman だ。彼はニューヨークタイムズの記者で、『The World Is Flat』や『The Lexus and the Olive Tree』、最近では『Hot, Flat and Crowded』という本で、グローバリゼーションについて書いている。温暖化し、人が増えすぎ、しかも情報でフラットな世界になっているところでは、皆がインターコネクテッド繋がりがあつた世界に住んでいる。日本もソマリアで起きていることと無関係ではいられない。

そういうことから言うと、それぞれの各個研究のフロンティアは非常に大事ではあるが、その進展は国がどのような政策で進めるのか、にかかっている。大学や研究所の中間管理職から上に行く人、あるいは政府の人たちの一番大事な使命は、次世代の、いろいろな可能性のある人たちのポテンシャルをどう引き出すかということだ。最終的にグローバル時代の日本という国を考え、それから科学という国境のない分野の将来を考えると、グローバルな課題へどれだけチャレンジし、それにはどのような意味があるのかという構想アーキテクトを全体として考えながら国としての姿を進めていくようなプロセスを、ぜひ大事にしていきたい。あくまでこれは最終的には政治的プロセスになるが、国民がある程度それを理解しない限り進まないということをもっと理解する必要がある。国立大学が独法化されて、みんな「文部科学省立大学」という様相で、ますます矮小化された存在になってしまったと感じる。これは科学者たちが普段から社会に向かって自分たちの意見を話し、表明し、自分たちはどういう学生を育て、どのような社会にしていって責任を果たそうとしているのか、という視点からの発言を全くしてこないからである。もっと社会的な責任を果たしてもらいたいと思うのだが、そういう発言があまりにも少ない。

次のリファレンスは、リンネ生誕 300 年に当たる昨年 (2007 年)、イギリスのリンネ協会で天皇陛下がなさった「Linnaeus and taxonomy in Japan」という講演である。このように素晴らしい、格調の高い講演をされる天皇陛下を持つ日本という国は幸せだと思うし、昔はこんなものはなかなか読めなかったのだが、今の connected つながっている世界では、自分たちが探そうと思えばネットで幾らでも知ることができる。これは素晴らしい技術の進歩だと思うのだが、それをどう使うかはあなたたち次第である。何を知りたいかが大事なわけで、そういうことをよく考えていただくと、やはり天皇陛下のこのレクチャーは素晴らしい。それがフルテキストで読めるのだから、ぜひ読んでいただきたい。天皇陛下のような政治的存在ではない、高い地位の方が世界に向かってどういうことを言っているかを私たちが知ることは、一人一人国民の自信と誇りになる。皆でその自信と誇りを共有し、ぎすぎすした世界の中にあつても、もう少し温かい気持ちとお互いの存在を常に意識する人間らしさを持つことが大事だと思う。

もう一つ今年の大事なことは、Charles Darwin の『種の起源』の出版 150 周年を迎えたことである。神様がすべてを作ったと思われている時代にあの本を出すことは極めて危険なことであったが、それは大きなインパクトを与えた。そして今、どうしてそういうことが起こるのかを考え、さらにその仮説を解く方法は、100 年前よりはるかに進歩している。ただ知りたいから研究しているという人もいていいのだが、それにはどのような理由、思想、意義があるのかを考える

ことも大事である。

世界の人口は今や 67 億人、2050 年までに 90 億人になる。そしてどんどん気候変動と地球温暖化がすすみ、食糧不足は確実に起こる。日本も含めて、途上国でさえもかなりの人がメタボリックシンドロームなどということを言っている一方で、毎年 1000 万人が飢え死にしている。そのときに何かできるかということを見ると、突然そちらの方に一生懸命になる人もいるかもしれない。そういういろいろな人たちが出てくる国、多様性、異質性が豊かで、許容性の高いことが、これからは特に大事なのである。日本は好むと好まざるとにかかわらず、まだ世界第 2 位の経済大国だ。国内にたくさんの問題を抱えている、特に経済が大きな課題であることは、日本だけではない。ムシャラフがやめ、ブットさんが暗殺された後の今のパキстанはひどいもので、パキстанとカシミールとインドがどうなるのか。そういう話もしておくことは大事で、私たちには関係ないとは言えない世の中になってしまっているのである。

最後のリファレンスは、**Kennewick man** についてのものである。もちろんバイオリソースは大事なので、ぜひやってほしいと思って書いておいた。15 万年ほど前、東アフリカのグレート・リフト・バレーで私たちホモサピエンスは生まれた。アフリカのこの広大な場所へ行くと、なぜか「何でそんなところから？」と思うような子供たちを育てることも大事だろう。何か無性に懐かしくなって感慨にふける人が少し出てくるのも楽しいのではないかと思う。

アジア・太平洋の人たちがどこから来たかということが、例えばミトコンドリアの DNA から分析されたりするが、実はアメリカ大陸へは、1 万～2 万年ぐらい前に人間が行ったのではないかと、そのころは多分氷河期だったのではないかという話がある。**Kennewick man** というのは、ポートランドで見つかった人体なのだが、最近その分析結果から、北米大陸に最初に行った人間はアイヌだったのではないかという説も出てきた。どうも日本人が最初にアメリカ大陸へ渡ったのではないかと。アメリカは日本人が見つけた、ぐらいのことを言ってもいいのではないかというようなデータも出てきているのである。

研究は楽しい。やりたいことをやれる幸せな世の中だが、グローバルな世の中で、自分は最終的にどういうことに貢献できるのかということを考えるために、ぜひ若いときに、遊びでも勉強でもいいから、世界にはいろいろな人がいる、日本もいいところがある、変なところもあることを実体験として感じる機会をたくさん作ってもらいたいと思う。

そういう趣旨で、今年文部科学省から、特に大学の学部学生を 1 年交換留学させようという予算も出している。日本は海外に留学する人が減っている。世界は反対だ。世界中で人がどんどん動いて、特に次の世代の人たちが世界の大学（大学院ではないのだ）にどんどん行こうと行動している中で、日本だけがますます引きこもり症候群になっている。これではコモドア・ペリーが来る前。明治維新のころまで戻ってしまうのではないかと、私は心配している。サイエンスは特にルネッサンス以後大きく進み、解析の方法、技術はこの 50 年で猛烈に進んだが、それは何なのかということを考えてみると素晴らしい新しい機会もあるし、将来ある若い研究者たちが、どういう世界を自分たちは作っていくのか、どういう役割を担えるのかということを考えてなくては行けないと、このような機会に話をさせていただいたわけである。

しかし、本当に皆と一緒に日本がグローバル世界でどんな役割ができるのだろうか。それを役

所や大学の人たちに聞くときできない理由ばかり言うが、そんなことはないのである。ここにいる若い人たちにはぜひ考えてほしい。1年前にオバマがアメリカ大統領になるなどと本気で考えた人がいるだろうか。けれども、そういうことが起こるのである。もちろん、オバマは本人のキャラクターとバックグラウンドがアメリカの下層の共感と呼んだということもあるし、演説が上手だということや、いい人をブレーンに採ったということもあるが、もう一つ、彼はファンドレイジングがうまかったのである。今までのプレジデントがワンディッシュ 5000 ドル、1 万ドルというファンドレイジングをしてきたのに対して、携帯電話などいろいろな IT 技術で 10 ドルでも 50 ドルでもいいという話をして、みんなが参加できるようにした。これは IT という技術をどのように使うかというだけの話で、1 人が立ち上がれば 2 人、3 人とだんだん立ち上がる人が増えてきて、「一緒になれば変えられる Yes, Together, We Can」というのが、彼の前向きのメッセージだ。

そういう意味では、皆さん方にもできないことはないのである。私が言っていることが少しでもいいと思ったら、普段の忙しい時間のうちの 5% でいいので、何をしようか、どうしたらできるか、を考える時間に使ってみなさい。そして、できない理由を言う前に、いいと思ったら毎日の行動の 5% でもいいから一歩そちらへ動いてみてほしい。皆さんに期待している。「Yes, We Can!」。